

地域の元気を創出・拡大

8つの地域

プロジェクト

モデル



加藤恵正さん

兵庫県立大学大学院教授(減災復興政策研究科)

かつて阪神工業地帯として栄えたベイエリアを、新たな集客・交流エリアとして発展させていこうという「阪神・淡路大交流プロジェクト」。発想の原点に何があるのか、実行に向けてどんなことが必要かなどを、プロジェクトに関わっている加藤恵正さん(兵庫県立大学大学院教授<減災復興政策研究科>)、上村敏之さん(関西学院大学学長補佐・経済学部教授)、定藤博子さん(阪南大学経済学部准教授)が話し合いました。

ベイエリアの強みと魅力

加藤 このプロジェクトは、旧来の産業空間から広義の集客を核とするビジネス・エンターテインメント空間への転換を目指すものです。ベイエリアが蓄積・内包するポテンシャルを最大限顕在化していくことが重要です。今、技術的・社会的な転換点を迎えて、この地域を再び生き返らせる計画が求められています。経済的には集客交流が核心部ですが、その計画に、日本経済の現状を突破する実験地域としての役割を組み込めれば。その上で、計画を実行していく仕組みをつくるのです。関西圏は文化と自然に富んだエリアで、東京圏にはない魅力を後背地に持ち、3つの空港と港湾もある。より密度濃く連動し、もともと持つ力をより顕在化させる方向でベイエリアをつくり直せ、と思っています。

上村 プロジェクトに淡路を含んでいることが重要です。一般的にベイエリアは通勤・通学の人たちが住むイメージですが、その生活の繰返しはしんどい。だから、淡路には癒やしと食を求めたい。最近では社内にテントを張ったりしてストレス軽減を図る会社が増えている時代。衣食住と癒やしがバランスよくそろうベイエリアには大きな魅力があります。

定藤 阪神間と淡路島をつなげると、多様なストーリーが紡げます。淡路島はオノコロの島、食材も豊か。大阪・淀川に砂州がで

きるところから国生み神話が生まれたという研究者もいます。さらに明治以降の工業化では、東京に劣らぬ日本最先端の発展を遂げてきました。これまで阪神間モダニズム文化を担ってきた年配の方々の経験や、大きな被害を受けた25年前の阪神・淡路大震災からいかに立ち直ってきたか……。それらの要素からどんなストーリーを紡げば新たな魅力となるのか。大学も多く、若い方々もたくさんいらっしゃるので、ぜひ一緒に見つけていきたいと思います。



どのように姿を描き、実現していくか

上村 少し前に我々は船に乗ってベイエリアを視察しましたね。海から見ると各拠点がとても近かった。例えば関西3空港、神戸の医療産業都市、USJ、これから大阪・関西万博がある舞洲、点在する拠点をどう結ぶか考える時、まず陸路を考えてしまいますが、ベイエリアは海でつながっています。今後、AI技術などを使った自動運航船などで、どうやって海の道を創っていくか。society3.0に留まっているベイエリアを、4.0を経ないで政府が目指す5.0に飛躍させる発想の転換が求められます。「人間は構想したものはすべて実現することができ

1 阪神・淡路大交流プロジェクト

専門家に
ご意見を伺いました



上村敏之さん

関西学院大学学長補佐・経済学部教授



定藤博子さん

阪南大学経済学部准教授



2 地場産業を活かした 若者女性集積プロジェクト

播州織・皮革などファッション分野の地場産業が集まる播磨地域で、生産・流通・観光の新しい人の流れをつくります。目指すのは、世界一の絹織物産地・リゾート地で有名なイタリア北部のコモ。ミラノの北にあるこのまちでは約2400の事業所が撚糸織布・染色・生産加工などの機能を分担し、ヨーロッパのシルク製品の8割を生み出しています。事業所を束ねるコンバータ（産元商社）は、マーケティングから後継者育成、一流ブランドからの受注窓口を一括して担い、オーダーごとにデザイン・生産計画を作成。必要な事業所を結んで仕上げています。

播州織の産地でも13の産元商社が東京・大阪から受注していますが、課題はブランド力。そこで西脇市は首都圏の服飾学校卒業生ら22人を招き入れ、播州織デザイナーの卵として養成。今後は最終製品化に向けた縫製工場を開設する予定です。



る」といわれます。だからまず、どれだけ構想を具体化できるかが勝負になりますね。

定藤 大阪・関西万博の会場予想図は、細胞が連関しあうようなイメージ。日本館が中心ではなく、各ゾーンに各パビリオン、拠点を配置し、それぞれにつながっています。モザイク模様のような未来社会の中で多様性をどう生かすのか。中心を強く主張するのではなく、兵庫県の様々なコンテンツを万博の何とどのようにつなげるのかを考えると、万博の効果を広く波及、長く持続させる方法が見つかると思います。

上村 ベイエリアは複数の自治体にまたがるので、誰がリーダーシップを取るのかが非常に難しい。何らかの形で民間企業を巻き込んだ再開発のための組織体が必要になるでしょう。個々のプロジェクトは、地方自治体や民間企業が協力し、一つひとつやっていく。おそらくたくさん失敗するでしょうが、100のトライがあって一つ成功事例があればよいイメージで。民間も参入し、大胆な規制緩和をして、既得権は打破する。法律・条例を改正して、実証実験の場にする事で新しいベイエリアをつくっていかない。

ベイを「動かす」旗艦プロジェクトを

加藤 賛成です。一つの高質な圏域であるにもかかわらず、バラバラに分断されていたことがベイエリアの発展を大きく阻害



してきました。複数の行政区域にまたがる連担地域の整備については世界で既に経験があります。古くは、1980年代のドイツで、17の自治体が絡んだ800平方キロに及ぶルール工業地域でのIBAエムシャールパークという実験プロジェクトがあります。ここでは、少数の専門家チームが再整備計画の策定やプロジェクトの認定など、実質的に圏域全体を動かしていたのです。こうしたIBAの試みは、ベイ再生の仕組みを考えるうえでも示唆的です。まず、ベイエリアを一体的にみる司令塔が必要です。第二に、ベイエリアを特区として、エンタープライズ・ゾーンやBID*などを用いて、ベイを「動かす」ことが必要でしょう。いずれかの地区で大胆な提案を結集したフラッグ・シップ・プロジェクトを起動してはどうでしょうか。

上村 計画づくり段階は少人数で、プロジェクト全体をまとめる一つの大きな組織と、機動的に動ける小さな組織がある。二つの組織でPDCAを回していくのがいいのではないのでしょうか。

加藤 言い尽くされていますが、経済界、

行政、学会など様々な人が一堂に会して自由闊達に議論できるプラットフォームをつくるのが重要なんです。

上村 その上で、いかにいい未来をベイエリアに込めるかですね。突拍子もない計画が出てくると拒絶されますから、定藤先生が話された文化や歴史を背負いつつ、このまちらしい発展とはいかにあるべきかを考えたいですね。

遊びや楽しみを仕事に取り入れる

定藤 仕事は一つの時代が終わると趣味になるといいます。昔、狩猟採集や農耕は、それをしないと生きていけないから仕事でしたが、時代が進み、工業社会になると狩りや園芸という趣味になり、手工業は機械工業の世界でDIYという趣味になりました。

加藤 大変興味深いですね。

定藤 ええ。今いろんな技術革新で一人ひとりが仕事場に楽しみを見いだせる社会に変わりつつある。もしかしたら将来、デスクワークも趣味になるかもしれません。上村先生が話されたテントのある職場、ちょっとした遊びですよ。工業化と経済発展に伴い、欧米文化を取り入れた豊かな生活スタイルが阪神間モダニズムでした。今後は、イノベーションによって、遊びを取り入れたゆとりある仕事場と生活スタイルが確立され、その発展形が生まれてくるかもしれません。

